

第263回原医研セミナー

第27回放射線災害・医科学研究 機構・拠点研究推進ミーティング

以下のとおり開催いたしますので、ご参加くださいますよう、ご案内いたします。

開催日時：2024年12月24日（火）17時30分～

開催方法：オンライン

接続先：Zoom(ミーティング) ID：890 6191 5257

Zoom URL：

<https://us02web.zoom.us/j/89061915257?pwd=Uk93L2JWWDJ3dnFkYmkvSjFGN21DZz09>

Zoom パスワード：538773（上記 URL をクリックして参加する場合は入力不要です）

タイトル：成人T細胞白血病／リンパ腫ではスーパーエンハンサーによって RUNX1 の発現が制御され、治療標的となる

発表者：長崎大学 原爆後障害医療研究所 原研内科 准教授 安東恒史 先生

成人T細胞白血病／リンパ腫（ATL）は極めて予後不良であり、新規の治療薬が必要とされている。スーパーエンハンサー（SE）は、転写因子と転写制御因子の複合体が密に蓄積したエンハンサー領域であり、細胞の特性を決定する特徴的な遺伝子の発現を制御する。プロモドメインタンパク質4（BRD4）阻害剤である JQ1 は、SE を介した遺伝子発現制御を阻害することにより抗腫瘍効果を発揮する。今回、SE が介在する ATL 発症の分子メカニズムを解明するために、ATL 細胞株に JQ1 を作用させ、マイクロアレイ解析と、抗 BRD4 抗体を用いた ChIP-seq を行った。SE を介して発現制御され、さらにすでに阻害剤が存在する RUNX1 を治療標的分子として同定した。ATL 細胞（ST-1、KK-1、KOB）の増殖に対して、RUNX1 阻害剤は用量依存的に細胞増殖抑制効果を示した。また shRNA による RUNX1 ノックダウンも細胞増殖抑制効果を示した。

ATL において RUNX1 の発現が SE を介して制御されていること、そして RUNX1 が ATL の新規治療標的となる可能性を示した。

タイトル：若年甲状腺腫瘍症例 220 例の検討

**発表者：福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター 甲状腺内分泌学講座
教授 古屋文彦 先生**

【背景】福島県「県民健康調査」での甲状腺検査において、「悪性ないし悪性疑い」と判定された受診者に対し、2022 年 6 月までに 220 人の外科治療が福島県立医大甲状腺内分泌外科において実施されている。

【方法】220 人の臨床所見、手術検体の組織・病理所見について検討した。

【結果】199 人に片葉切除、21 人に全摘が施行され、205 例は通常型乳頭がんであった。周囲脂肪組織へ浸潤を 112 人、対側の頸部外側区域リンパ節転移 pN1b を 30 人に認めた。片葉切除例では遷延する副甲状腺機能低下症や反回神経麻痺などの術後合併症はみられなかった。

【結語】甲状腺検査によって発見された甲状腺がんに対して低侵襲な外科治療が行われていることが示された。発見された甲状腺がんは、これまでの小児散发例、チヨルノービリ事故後に診断された甲状腺がんの病理所見とは異なり、成人の甲状腺がんと似た特徴を有している可能性が示唆された。